



春号



民話を楽しもう

小山市 山伏ごんだゆう

『とちぎの民話への招待』上野直哲／著 随想舎
挿絵・佐々木 明

❁ むかしむかし、街道のそばに茶店があったんだって。ある時、ごんだゆうという山伏が、日光へ修行に行く途中で、腹がへってしょうがねえもんだから、その茶店によったんだってよ。

「ばあさん、ばあさん、すぐにできるものないかい。おら、はらぺこなんだ」って、

おくの方からのっそり出てきた、前かけをしめたばあさんにたのんだんだって、みすほらしいかつこうのごんだゆうを、じろっ



「おは、小山市の民話を紹介します。むかしむかし……」

「じいちゃん、ごんだゆうはなにがごんだゆう？」

と下から上まで、うたがいぶかそうな目で見てよ、

「うどんができたがよ、だけんど、これから湯も

わかさにゃならんし、うどんたまも、そんなにぶってねんだ……」

って、しばらく考え込んで、

「きょうは、なんにもできねえな」

って、さもめいわくげに言っておくへひっこんでしまったんだと。ごんだゆうははらの虫がく〜く〜なるし、



何かくえんべと思って入った店で、すげなくことわられてしまったもんだから、がっかりして、店先のえんだいにしゃがみこんでしまったんだと。



しばらくしてっから、ごんだゆうの休んでいる前を、二人のたびすがたのさむらいが通りかかったんだって。

「おい、いいところに茶店があるぞ。

ちよつと昼時だ。ここでなんか

はらのたしになるもんでもくっ

てくべ」

って、二人のさむらいが店に

入っていったんだと。

「おい、だれかいねえかい」

ってととなると、さっきのばあさ

んが、こしをまげて出てきたん

だ。

「うどんでも、できねえかね」

ってさむらいが言っつ、

「さっきのぼうずとは、みなり

がせんせんちがうぞ。こりゃ、

ずいぶん金もってんべえ」と心
の中で思ったんだな。

「うどんかね。今、あつたかい
のを作ってやっから、ちよつと
ばっかしまつててくだんせえ
よ」

ごんだゆうの時とはまったく、
ちがう人みたいに、あいそがい
いんだって。

それっから、うどんたまを出
してきて、めん板にのせるや、
棒きょうに、クルッ、クルッ
とのばしはじめたんだと。そん
で、ほうちよつでトントント
ンって、きれいに切り上げたん
だ。そして、うらの井戸か
ら、大なべに水くんできて、か
まどののせ、たぎつけの麦わら
に火をつけて、もしはじめたん
だ。だけど、あとからまき
をくべてもくべても、火は真っ
赤にほのおを出してるだけで、

なべからは、いつになってもゆげひとつ出てこねえんだと。

「おかしいなあ、こんなことなねえ」

って、なべつぶたあけたり、しめたりしてんだけど、いっこうに湯がわかねえんだって。

待っていたさむらいは、いつになってもできてこねえんで、

「ばあさん、おれたちはらがへってんだ。はやくしてくれ。そんなこっちゃ、夜になっちまうぞ」

って、ばあさんにさいそくするんだと。

しかし、いっくもやっても、湯がわいてこねえんで、ばあさん、まいっちまったんだと。



3 そんなとき、店にすみっこにいたこんだゆうがばあさんのところへ来て、

「なんで、まきをくべても、湯がにいたたねえか、知ってっか」

って、いったんだと。ばあさん、

「こまった、こまった。おきゃくはまってるんだが、いっくらやっても、だめなんだ、どうかしてんだ……」

って、あわててんだと。そんで、こんだゆうが、

「湯をにいたたせねえのは、

このおれが法をかけたからだ。身なりのわるいおれが、はら

へってたのんだときには、ことわって

おいて、二本差しのおさむらいにゃあ、二つ返事でうどんを作ってやるなんて道理にあわねえ。これからなあ、人のすがた、かっこつであきないするんだったら、この湯は、すっとにいたたせねえ」
って、言い聞かせたんだと。



ばあさんは、びっくり
しちゃって、

「もう、そんなことは、
ぜったいしねえから、
かんべんしてくれ、か
んべんしてくれ」
って、地べたに、ひた
いをつけんばかりにあ
やまったんだって。



見る間に、ぶくぶくあ
わを立てながら、いっ
ぺんにわきあがったん
だ。

そうすると、今まで、
火をいくらもしても、
ぜんぜんゆげひとつ出
なかつたなべの水が、

こんな話きいたっけ。
おしまい